

渡辺鶴禾短歌集

わたなべひよか

指揮者視点

ベランダの日差し暖か春來たる三色スミレ爛漫と咲く
プリムラのジュリアン赤く咲きにけり

我がガーデンは春の酣闌

まだ寒くダウンコートが手放せず突風の舞う住宅街に
七時には起きて朝ドラ見終えたら韓ドラ見たる私の日課
植木鉢オーケストラの如並べ指揮者視点で花を觀たるや
野良猫が庭で寝そべり日向ぼこ窓を開けると慌てて逃げし
二年前娘は独立し吾も一人今のコーポに移り住みたる
吾の好む部屋になりたる空間に和みて遠く出かけたくなし
乾物のシイタケだしを飲み干してぜん息完治鼻炎も完治
待望のシングルライフ迎えけり髪も染めずに白髪増えたる
八月で還暦なりし吾の髪はグレーになりて髪伸ばしたる
夏頃に髪結い上げて首涼し去年も髪を結い上げていた

毎朝の化粧したるは日課なり宅配業者突然来たる

病ゆえ約束できぬ身となりし日々の装い外出できる

ラメ入りのサーモンピンクマニキュアを

十指爪塗る吾の楽しみや

多勢の中での孤独深かりし一人の孤独気付きもしない

朝晩を仏に願う身・口・意吾の罪許したまえと祈る

デイケアで六人座るテーブルに話のはずむ時間は早し

十年後二十年後の吾の暮らし今日が大事や疎かにせず

連れられて道覚えたる此の頃や

世話焼く人のおればこそかな

コーポでも町会があり誘われて非常事態に助け合うなり

三月の十一日を忘れるな東日本の震災日なり

夢の中「明日を信じろ」声がした夢からさめて心スツキリ